

家庭科における自立概念の変遷と 高校生の自立に対する意識

齋 藤 美重子*

Changes in the Concept of Independence in Home Economics and the High School Students' Consciousness of Independence

Mieko SAITO

要 旨

本研究は高等学校家庭科教科書における自立に関する内容の変遷を辿り、高校生の自立に対する意識を明らかにするとともに教科書との関連性を検討することを目的とする。研究対象とする教科書は2019年度東京都及び千葉県で採択数の最も多い東京書籍家庭科教科書である。また、2019年3月A学園の高校1年生88人を対象に質問紙調査を行い、高校生の自立に対する意識を分析した。有効回答数81人、有効回答率92%であった。

その結果、家庭科教科書における自立に関する記述は、乳幼児期に始まり、改訂を経て、青年期、成人期、高齢期まで拡大したことがわかった。生活的自立や経済的自立のほか、精神的・社会的・身体的・性的自立についても記載され、家庭科内容における自立の比重が高まっていることが明らかになった。自立に対する高校生の意識は、混合研究方法による分析の結果、現代社会をふまえて社会的自立や精神的自立等を複合的に捉え、人や制度との共感的応答性のある自立が求められた。高校家庭科教科書内容における自立と高校生の自立観には関連性が認められた。家庭科では共感的応答性のある授業のなかで生活の主体者意識を誘起させ、自立や自分らしい最適な生活の創造を複合的・重層的に育成していくことが示唆された。

キーワード：家庭科，自立，高校生，教科書，混合研究方法

1 はじめに

世界では情報化が進展し、多様性の高まりを見せているかのようであるが、グローバル化の綻びが紛争やテロ、難民、格差拡大などによって可視化され、効率化、個人化の広がり、価値観の揺らぎや生きづらさを抱えさせる。AI技術の発展に伴う合理化を促進させようという

*准教授 家庭科教育，生活経営学

流れによって、今後ますます社会は変容することが予想される。主体的に思考し、想像力や創造力を働かせ、時に答えの出ない問題に耐える力（ネガティブ・ケイパビリティ¹）を持って、他との関係を構築しながら行動できるかどうか、人生を大きく左右することになるだろう。家庭科の基礎学問である家政学では、次のように定義している。

Home Economics is a field of study and profession, situated in the human sciences that draws from a range of disciplines to achieve optimal and sustainable living for individuals, families and communities.

(International Federation for Home Economics IFHE, 2008 Position Statement “Home Economics in the 21st Century”) (下線部筆者)

家政学とは個人・家族・コミュニティが自ら生活課題を予防・解決し、生活の質を向上させる能力の開発を支援するために、家庭を中心とした人間生活における人と環境との相互作用について研究する実践科学であり総合科学である。家政学は、生活者の福祉の視点から、持続可能な社会における質の高い生活を具現化するライフスタイルと生活環境のありようを提案する。(日本家政学会家政原論部会, 2013)

家政学の研究対象は個人の生活の質（QOL）や well-being だけでなく、個人・家族・地域という社会全体における生活に拡張され、「人と環境との相互作用」という動的な視点で最適で持続可能な生活、すなわち幸福の増進に寄与しなければならないとされた。また、家政学の独自性として、「愛情、ケア、互惠関係、人間的成長、文化の伝承と向上などの家政学的な価値（家政学の倫理）に基づいて課題を認識するという視座および価値基準、並びに最終的には家庭を中心とする人間生活の質の向上に資するという目的を有すること」が示された（2013, 日本家政学会家政原論部会）。

矢野（2013）は家庭科の独自性として、「生活に必要な身の回りのことを自分ですることができ、自分なりの価値観や基準で生活上の物事を判断し、自分らしく生きる力」である生活的自立育成をあげ、さらに、家庭科教育がめざす自立と共生が、人間としての自立を担っているとした。岡野（2015）は政治思想史における「自立」の前提（人間には生産能力が備わっていること、社会とのつながりが基本的にモノを媒介としていること）を批判し、家庭科教育に「ケアの倫理²」の導入を提案した。つまり、家庭科では、人間性豊かな「個」を育てるために、人と人との応答関係に注視し生活者の視点から生活課題を探究し、自立、共生、他（人・自然・

社会・経済)とのつながりを学び、生活を創造していくことを目標とするということである。

筆者は自立、共生、生活の創造が相互に結びつくことが重要であると捉える。今後の社会を生きる高校生には、「人と環境」との作用を考えながら、人・自然・社会・経済との関係性の中で自分らしい生活を構築する土台として、自立が重要であると考え。自己アイデンティティの形成と自立があつてこそ、依存に陥らない平等な関係性の構築ができるのではないだろうか。また、「つながりを煽られる」(土井, 2014) 不安な社会だからこそ、生きていく上での自立を改めて問い直す必要がある。それでは、現在の高校生は自立をどのように捉えているのだろうか。西田ら(2001)は高校生の学年による自立観の違いを明らかにした。土岐(2018)は研究論文による自立概念の変遷を明らかにした。しかし、先行研究において高校生の自立意識と教科書との関連性を示したものは管見の限り見当たらない。

そこで、高等学校家庭科教科書における自立概念の変遷を辿ったうえで、現在の高校生の自立に対する意識を明らかにし、教科書による自立内容と高校生が意識する自立を比較検討することで関連性を探り、今後の家庭科授業に示唆を得たい。

2 分析対象および分析方法

第一に、学習指導要領の変遷を踏まえ、高等学校家庭科教科書の自立に関する記述を抽出し、変遷を探った。2019年度千葉県公立高等学校および東京都公立高等学校・公立中等教育学校において家庭基礎(2単位)・家庭総合(4単位)とも東京書籍家庭科教科書が最も採択数が多かった(千葉県教育委員会, 東京都教育委員会, 2018)。これらの教科書が多くの高校生の目に触れると推定でき、調査に値する。よって、1977年開館した公益財団法人「教科書研究センター」附属教科書図書館および1936年日本で最初にできた教科書図書館である東京書籍株式会社附設教科書図書館「東書文庫」に所蔵された戦後東京書籍出版の家庭科教科書全16冊を分析対象とした。ただし、東京書籍の家庭科教科書は1981(昭和56)年検定済み1982(昭和57)年以降に発行されたため、それ以前に関しては実教出版家庭科教科書のデータ(齋藤, 2019)に基づいて考察した。「自立」とそれに類する「独立」「社会人」「自覚」「自律」「成熟」に関する内容を抽出・分析し、教科書における自立概念の変遷を明らかにした。

第二に、2019年3月A学園A高等学校において、1年生88名を対象に自由記述方式の質問紙調査を行った。A高等学校は私立中高一貫の男子進学校であり、思考力も自分の考えを文章でまとめる表現力も優れており、信びよう性が高いと判断し当校で実施した。生徒の回答は計量テキスト分析ソフトKH Coder3を用い、「共起ネットワーク」を作成し分析するとともに、

Parnafes (2012) を援用しマイクロジェネティック法 (チン & シェリン, 2018) により質的に記述分析を行った。この混合研究法により高校生の自立に対する意識を明らかにし、教科書との関連性を検討するとともに、今後の家庭科授業における高校生の自立を促す手法について示唆を得たいと考える。

3 家庭科教科書にみられる自立

(1) 研究対象および研究方法

前述のとおり、東京書籍が戦後発行した家庭科教科書における自立に関する文脈を抽出し、先行研究 (齋藤, 2019) と比較検討する。戦後の東京書籍による家庭科教科書への参入は1981年検定済み以降であるため、1981年検定以降のものが対象となる。なお、高等学校「家庭」は1978年告示の学習指導要領では科目「家庭一般」必修であったが、1989年告示の学習指導要領では「家庭一般」「生活一般」「生活技術」から1科目選択必修になり、1999年告示の学習指導要領では「家庭総合」「家庭基礎」「生活技術」から1科目選択必修となり、名称が変わった。それに伴い東京書籍における教科書名も変わり、本稿では東京書籍が発行した家庭科教科書『家庭一般』『生活一般』『家庭総合』『家庭基礎』全16冊を対象とした。研究対象全16冊における「自立」に類する「独立」「社会人」「自覚」「自律」「成熟」を含む文脈を抽出し分析する。

(2) 教科書分析結果と考察

1991年から2017年までの研究論文の中で、家庭科研究における自立概念は第1期(1991～1996)個人の生活的自立から、第2期(1996～2007)生活的自立のみならず精神的自立、経済的自立、社会的自立、第3期(2008～2015)他者とのかかわりから自立を捉える研究へと変遷した(土岐, 2018)。齋藤(2019)は、戦後1951年～2016年検定済み実教出版家庭科教科書を調査分析し、1956年～1962年発行では社会的自立、生活的自立を、1963年～1998年発行では他に依存しない自立、2003年～2017年現在発行では相互応答性を創り出す自立へという変遷を明らかにした。

表1より、東京書籍家庭科教科書(①～⑯)では一貫して、保育分野において自立させるという幼児の発達の項に記載されていた。また、「自立」に関する内容は、改訂を重ねるごとに項目が追加され、紙幅の増加がみられた。

1987年発行③では乳幼児の発達だけでなく、結婚の条件(成人)として「精神的成熟」「社

家庭科における自立概念の変遷と高校生の自立に対する意識

表1 東京書籍高等学校家庭科教科書にみられる自立に関する記述

No.	教科書タイトル 検定年 発行年	自立に関する分野・「記述」 (独立・社会人・自覚・自立・自律・成熟)	備考欄
①	『家庭一般』 1981年検 1982年発行	○家庭経営編家族と家庭経営・家事労働の特徴「自律的である」(p. 26) ○母性の健康・保育編乳幼児の成長「自立性」(p. 243)	1978年8月告示 (1982～93年度 学年進行実施)
②	『改訂家庭一般』 1984年改訂検 1985年発行	○家庭経営編家族と家庭経営・家事労働の特徴「自律的である」(p. 26) ○母性の健康・保育編乳幼児の成長「自立性」(p. 259)	教科「家庭」 「家庭一般」:す べての女子必 修4単位専 門科目19科目
③	『家庭一般』 1987年検 1988年発行	○家庭経営編母性の健康・結婚「心身ともに成熟」「精神的成熟」(p. 68), 乳幼児の保育「自立」(p. 80), 「生活習慣の自立」「自立感」(p. 91)	
④	『改訂家庭一般』 1990年改訂検 1991年発行	○「人の一生と家族周期」・乳幼児「基本的生活習慣の自立」、青年前期「身 体、健康、生活などの自律的管理」、青年後期「独立」「社会人」、前成人 期「人間としての自立」「社会人」、成人期「おとなとしての社会的責任」 「子どもの自立への援助」(見開き頁) ○家庭経営編家族・青年期以降「経済的に自立」、高齢期の「身体的、精神的、 経済的な自立」支援(pp. 35-36), 家事労働「自分で責任をもてる」 (p. 50), 消費者「自主的な判断で合理的な消費生活を営む消費者」(p. 65) ○人間の誕生・保育編・結婚「精神的にも社会的にも成熟」「心身ともに成 熟」「精神的成熟」「経済的に自立」(p. 72), 保育「自立」(p. 83-84), 乳 幼児の保育「生活習慣の自立」「自立感」(p. 95)	
⑤	『家庭一般 人 間としての豊かな生活をめざして』 1993年検 1994年発行	○「人の一生と家族周期」・乳幼児「基本的生活習慣の自立」、青年前期「身 体、健康、生活などの自律的管理」、青年後期「独立」「社会人」、前成人 期「人間としての自立」「社会人」、成人期「大人としての社会的責任」「子 どもの自立への援助」(見開き頁3-4) ○「消費者の自覚」・「自立した消費者」(見開き頁7) ○「はじめに」・「2つの自立」「経済的自立」「生活的自立」(p. 7) ○家族と家庭・生活設計「経済的自立」(p. 14), 高齢期「身体的、精神的、 経済的な自立」支援(p. 28) ○暮らしと経済・「消費者の自覚」(p. 51), 家事労働「自律的」(p. 58) ○育つ・性「人格的な性の確立」(p. 63), 結婚「精神的にも身体的にも、 社会的にも成熟」「自立した人間どうし」「夫婦として、親としての自覚 と責任」(p. 65), 幼児「自立心」「大人からの自立」(p. 76), 人として 「自立とは身体的、精神的、生活的に他に頼らずに自力で生きていけるよ うになること」(p. 78), 子どもの生活「自立」「自立性」「自己の独立」 (pp. 78-79), 「親の成長と自立」(p. 88)	1989年3月告示 (1994～2002年 度学年進行実 施) 教科「家庭」 「家庭一般」「生 活技術」「生活 一般」(各4単 位)から1科目 選択必修 (男女必修) 専門科目23科 目
⑥	『生活一般 人 間としての豊かな生活をめざして』 1993年検 1994年発行	○「人の一生と家族周期」・乳幼児「基本的生活習慣の自立」、青年前期「身 体、健康、生活などの自律的管理」、青年後期「独立」「社会人」、前成人 期「人間としての自立」「社会人」、成人期「大人としての社会的責任」「子 どもの自立への援助」(見開き頁1-2) ○「消費者の自覚」・「自立した消費者」(見開き頁5) ○「はじめに」・「2つの自立」「経済的自立」「生活的自立」(p. 7) ○家族と家庭・生活設計「経済的自立」(p. 14), 高齢期「身体的、精神的、 経済的な自立」支援(pp. 28-29) ○暮らしと経済・経済「消費者の自覚」(p. 51), 家事労働「生活的に自立」 「自律的」「生活上の自立」(p. 58) ○子どもの発達・性「人格的な性の確立」(p. 62), 結婚「精神的にも身体的 にも、社会的にも成熟」「自立した人間どうし」「夫婦として、親として の自覚と責任」(p. 65), 幼児「自立心」「大人からの自立」「自立感」(p. 71) 「自立」(p. 73), 「自立心」(p. 75) ○保育・乳幼児の精神発達「自立」(p. 124-125), 地域社会「自立させる」 (p. 130)	

No.	教科書タイトル 検定年 発行年	自立に関する分野・「記述」 (独立・社会人・自覚・自立・自律・成熟)	備考欄
⑦	『家庭一般 人間としての豊かな生活を目指して』 1997年検 1998年発行	<ul style="list-style-type: none"> ○「人の一生と家族」・乳幼児「基本的生活習慣の自立」、青年前期「身体の健康、生活などの自律的管理」、青年後期「独立」「社会人」、前成人期「人間としての自立」「経済的自立」、成人期「大人としての社会的責任」「子どもの自立への援助」(見開き頁3-4) ○「はじめに」・「2つの自立」「経済的自立」「生活的自立」(p.7) ○家族と家庭・生活設計「経済的自立」「女性の経済的自立」(p.14)、結婚「経済的にも精神的にも自立」(p.18)、高齢期「独立」(p.26)「身体的、精神的、経済的な自立」支援(pp.27-28)、高齢者介護「自立」(p.29)、社会福祉「生活の自立」支援(p.30) ○暮らしと経済・経済「消費者の自覚」(p.51)、家事労働「自律的」「生活上の自立」(p.58) ○育つ・性「人格形成」「人間としての性の確立」(p.64)、結婚「精神的にも身体的にも、社会的にも成熟」「自立した人間どうし」「夫婦として、親としての自覚と責任」(p.65)、幼児「自立心」「大人からの自立」「自立感」(p.76)、「自立」(p.78)、「自立への歩み」(pp.79-81)、「親の成長と自立」(p.88) 	1989年3月告示 (1994～2002年度学年進行実施) 教科「家庭」 「家庭一般」「生活技術」「生活一般」(各4単位)から1科目目選択必修 (男女必修) 専門科目23科目
⑧	『生活一般 人間としての豊かな生活をめざして』 1997年検 1998年発行	<ul style="list-style-type: none"> ○「人の一生と家族」・乳幼児「基本的生活習慣の自立」、青年前期「身体の健康、生活などの自律的管理」、青年後期「独立」「社会人」、前成人期「人間としての自立」「経済的自立」、成人期「大人としての社会的責任」「子どもの自立への援助」(見開き頁3-4) ○「はじめに」・「2つの自立」「経済的自立」「生活的自立」(p.7) ○家族と家庭・生活設計「経済的自立」「女性の経済的自立」(p.14)、結婚「経済的にも精神的にも自立」(p.18)、高齢期「独立」(p.26)「経済的に自立」「身体的、精神的、経済的な自立」支援(pp.27-28)、高齢者介護「自立」(p.29)、社会福祉「生活の自立」支援(p.30) ○暮らしと経済・経済「消費者の自覚」(p.51)、家事労働「自律的」「生活上の自立」(p.58) ○子どもの発達・性「人格形成」「文化的・人格的な性の確立」(p.102)、結婚「成熟したひとりの人間どうし」「夫婦として、親としての自覚と責任」(p.105)、幼児「自立心」「大人からの自立」「自立心」(p.113)、乳幼児の生活「自立」(p.115) ○保育・乳幼児の精神発達「自立への歩み」「身辺の自立」(pp.130)、「反抗期と自立」(p.131) 	
⑨	『家庭総合 自立・共生・創造』 2002年検 2003年発行	<ul style="list-style-type: none"> ○「人の一生とライフステージ」・乳幼児期「基本的生活習慣の自立」、青年前期「身体の健康、生活などの自律的管理」、青年後期「独立」「社会人」、壮年期前期「人間としての自立」「経済的自立」「社会人」、壮年期後期「大人としての社会的責任」「子どもの自立への援助」(見開き頁3-4) ○人の一生と家族・家庭・「生活的自立」「経済的自立」(p.8)、青年期「親から自立」(p.11)、結婚「経済的にも精神的にも自立」(p.29) ○子どもの発達と保育・福祉・「自立への道」(p.38)、「自立への旅立ち」(p.45)、親「子どもを自立させる」(p.53) ○高齢者の生活と福祉・「日常生活の自立」「日常生活の動作の自立」「経済的にも自立」(p.70)、「自立が困難」(p.73)、「自立した生活」「自立要求」(p.75) ○衣生活の科学と文化・「衣生活の自立」(p.129) ○消費生活と資源・環境・「消費行動における自己責任」(p.196)、生活を支える収入「自立」(p.198)、「自己責任時代の消費者」(pp.214-215) 	1999年3月告示 (2003～2012年度年次進行実施) 普通教科「家庭」 「家庭基礎」(2単位) 「家庭総合」(4単位) 「生活技術」(4単位)から1科目目選択必修 専門教科「家庭」19科目 4単位だけでなく2単位科目設置

家庭科における自立概念の変遷と高校生の自立に対する意識

No.	教科書タイトル 検定年 発行年	自立に関する分野・「記述」 (独立・社会人・自覚・自立・自律・成熟)	備考欄
⑩	『家庭基礎 自立・共生・創造』 2002年検 2003年発行	<ul style="list-style-type: none"> ○「人の一生とライフステージ」・乳幼児期「基本的生活習慣の自立」、青年前期「身体の健康、生活などの自律的管理」、青年後期「独立」「社会人」、壮年期前期「人間としての自立」「経済的自立」「社会人」、壮年期後期「大人としての社会的責任」「子どもの自立への援助」(見開き頁3-4) ○「人生をつくる」・「経済的自立と生活的な自立」(見開き頁7-8) ○人の一生と家族・家庭・青年期「親から自立」(p. 11)、結婚「経済的にも精神的にも自立」(p. 23)、「自立して共に生きる」「経済的にも身近生活も自立」(p. 29) ○保育と福祉・「自立への旅立ち」「親から自立」「生活習慣の自立」(p. 36)、親「子どもを自立させる」(p. 38) ○高齢者の生活と福祉・「日常生活の自立」支援(p. 47)、「自立を促す補助具」(p. 49)、「日常生活の自立へ向けて」「身の回りのことができ、経済的にも自立」「自立が困難」(p. 52) ○家族の生活と健康・衣生活「衣生活の自立」(p. 99)、高齢者の住生活「自立した生活」(p. 132) ○消費生活と環境・「自己責任」(p. 157) 	<p>1999年3月告示(2003～2012年度年次進行実施)普通教科「家庭」「家庭基礎」(2単位)</p> <p>「家庭総合」(4単位)</p> <p>「生活技術」(4単位)から1科目選択必修専門教科「家庭」19科目</p> <p>4単位だけでなく2単位科目設置</p>
⑪	『家庭総合 自立・共生・創造』 2006年検 2007年発行	<ul style="list-style-type: none"> ○「人の一生とライフステージ」・乳幼児期「基本的生活習慣の自立」、青年前期「身体の健康、生活などの自律的管理」、青年後期「独立」「社会人」、壮年期前期「人間としての自立」「経済的自立」「社会人」、壮年期後期「大人としての社会的責任」「子どもの自立への援助」(見開き頁3-6) ○「自分らしく生きる」・「生活的自立、経済的自立」(p. 7) ○自分らしく生きる・青年期「親から自立」(pp. 10-11) ○自分の人生をつくる・一人暮らし「自分の身の回りのことを自分で整える自立」(p. 18)、結婚「経済的にも精神的にも自立」(p. 20)、「自立して共に生きる」「経済的にも身近生活も自立」(p. 33) ○共に育つ親と子・「自立への旅立ち」(p. 43)、親「子どもの自立を促す」(p. 51) ○高齢者と共に生きる・「日常生活の自立」「家事や身の回りのことができ、経済的にも自立」「日常生活動作が自立できない」(p. 70)、「健康で自立した生活」(p. 72) ○消費者として生きる・消費者として「自立」「消費者の自立」(pp. 100-101) ○生活設計 	<p>1999年3月告示(2003～2012年度年次進行実施)普通教科「家庭」「家庭基礎」(2単位)</p> <p>「家庭総合」(4単位)</p> <p>「生活技術」(4単位)から1科目選択必修専門教科「家庭」19科目</p> <p>4単位だけでなく2単位科目設置</p>
⑫	『家庭基礎 自立・共生・創造』 2006年検 2007年発行	<ul style="list-style-type: none"> ○「人の一生とライフステージ」・乳幼児期「基本的生活習慣の自立」、青年前期「身体の健康、生活などの自律的管理」、青年後期「独立」「社会人」、壮年期前期「人間としての自立」「経済的自立」「社会人」、壮年期後期「大人としての社会的責任」「子どもの自立への援助」(見開き頁3-4) ○「人生をつくる」・「経済的な自立と生活的な自立」(見開き頁5-6) ○自分らしく生きる・一人暮らし「自分の身の回りのことを自分で整える自立」(p. 13)、結婚「経済的にも精神的にも自立」(p. 15)、「自立して共に生きる」「経済的にも身近生活も自立」(p. 24) ○保育と子どもの福祉・「自立への旅立ち」「生活習慣の自立」「身の自立」(p. 31)、親「子どもの自立を促す」(p. 36) ○高齢者の生活と福祉・「日常生活の自立」「家事や身の回りのことができ、経済的にも自立」「日常生活動作が自立できない」(p. 52)、「健康で自立した生活」(p. 53) ○消費者としての生活と環境・消費者として「自立」「自己責任」「消費者の自立」(pp. 71-72) ○生活設計 	<p>1999年3月告示(2003～2012年度年次進行実施)普通教科「家庭」「家庭基礎」(2単位)</p> <p>「家庭総合」(4単位)</p> <p>「生活技術」(4単位)から1科目選択必修専門教科「家庭」19科目</p> <p>4単位だけでなく2単位科目設置</p>

No.	教科書タイトル 検定年 発行年	自立に関する分野・「記述」 (独立・社会人・自覚・自立・自律・成熟)	備考欄
⑬	『家庭総合 自立・共生・創造』 2012年検 2013年発行	<ul style="list-style-type: none"> ○「家庭科で学ぶ衣食住の自立」(見開き頁 pp. 1-2) ○自分らしい人生をつくる・乳幼児期「自律性」、<u>青年期「社会人」「独立」「精神的自立、生活面での自立、経済的な自立」準備、壮年期「人間としての自立」「子どもの自立を支援」「社会人」(p. 13)、青年期「生活的自立、経済的自立、精神的自立、社会的自立、性的自立」「生活的自立」「経済的自立」「社会的自立」「性的自立」(p. 15-16)、一人暮らし「自分の身の回りのことを自分で整える自立」(p. 18)、子どもを「自立させる」(p. 22)、結婚「経済的にも精神的にも自立」(p. 26)</u> ○保育・性「性的に成熟」(p. 42)、<u>保育「自立を援助する営み」(p. 44)、幼児期「自立」(p. 53)</u> ○<u>高齢社会を生きる・「健康で自立した生活」「日常生活が自立できない」「日常生活の自立が困難」(p. 70)、「老化と成熟」(p. 72)、住「高齢者の自立は可能」(p. 75)、「自立」(p. 76)、高齢者を支える仕組み「自立」(p. 81, 83, 87)</u> ○<u>経済生活を営む・「自立」「経済的に自立」(p. 94)、消費者の権利と責任「自立支援」「自立した主体者」(pp. 114)</u> ○<u>生活設計・「自立した人生」(p. 240)、「自立し共に生きるために」「精神的に自立」(p. 242)、「健康で自立した生活」(p. 243)</u> 	2009年3月告示 (2013～2021年度年次進行実施) 共通教科「家庭」 「家庭基礎」(2単位) 「家庭総合」(4単位) 「生活デザイン」(4単位)から1科目選択必修 専門教科「家庭」20科目
⑭	『家庭基礎 自立・共生・創造』 2012年検 2013年発行	<ul style="list-style-type: none"> ○「家庭科で学ぶ衣食住の自立」(見開き頁 pp. 1-2) ○自分らしい人生をつくる・乳幼児期「自律性」、<u>青年期「社会人」「独立」「精神的自立、生活面での自立、経済的な自立」準備、壮年期「人間としての自立」「子どもの自立を支援」「社会人」(p. 11)、青年期「生活的自立、経済的自立、精神的自立、社会的自立、性的自立」「生活的自立」「経済的自立」「性的自立」「社会的自立」「精神的自立」(p. 13)、一人暮らし「自分の身の回りのことを自分で整える自立」(p. 16)、子どもを「自立させる」(p. 17)、結婚「経済的にも精神的にも自立」(p. 22)、「性的に成熟」</u> ○<u>子どもと共に育つ・保育「自立を援助する営み」(p. 32)、幼児期「自立」(p. 41)</u> ○<u>高齢社会を生きる・「健康で自立した生活」「日常生活が自立できない」「日常生活の自立が困難」(p. 56)、「老化と成熟」(p. 58)、住「高齢者の自立は可能」(p. 59)、「日常生活の自立の課題」「経済的にも自立」「日常生活動作が自立できない」(p. 62)、高齢社会「自立」(p. 63)</u> ○<u>共に生き、共に支える・「自分らしく自立」「自立した生活」(p. 67)</u> ○<u>経済生活を営む・消費者の権利と責任「自立支援」(p. 175)</u> ○<u>生活設計・「自立した人生」(p. 240)、「自立し共に生きるために」「精神的に自立」(p. 184)、「健康で自立した生活」(p. 185)</u> 	

家庭科における自立概念の変遷と高校生の自立に対する意識

No.	教科書タイトル 検定年 発行年	自立に関する分野・「記述」 (独立・社会人・自覚・自立・自律・成熟)	備考欄
⑮	『家庭総合 自立・共生・創造』 2016年検 2017年発行	<p>○「人生の主人公として生きる」・「生活の自立」(見開き頁 pp. 12-13)</p> <p>○自分らしい人生をつくる・乳幼児期「自律性」、青年期「社会人」「独立」「精神的自立、生活的自立、経済的自立」準備、壮年期「人間として自立」「子どもの自立を支援」「社会人」(p. 15)、青年期「生活的自立、経済的自立、精神的自立、社会的自立、性的自立」「生活的自立」「精神的自立」「社会的自立」「経済的自立」「性的自立」(p. 17)、「生活技術の習得(生活的自立)」「自己決定(精神的自立)」「他者理解(社会的自立)」「職業への関心を高める(経済的自立)」(pp. 17-18)、一人暮らし「自分の身の回りのことを自分で整える自立」(p. 20)、子どもを「自立させる」(p. 24)、結婚「経済的にも精神的にも自立」(p. 30)</p> <p>○子どもと共に育つ・性「性的に成熟」(p. 44)、保育「自立を援助する営み」(p. 55)、幼児期「自立」(p. 55)</p> <p>○高齢社会を生きる・「健康で自立した生活」「日常生活が自立できない」「日常生活の自立が困難」(p. 74)、「老化と成熟」(p. 76)、住「高齢者の自立は可能」(p. 77)、「日常生活の自立の課題」「経済的にも自立」「自立した生活が困難」(p. 79)、「高齢者の自立を支える」「健康で自立した生活」「自立」(p. 80)、高齢社会を支える仕組み「自己負担」(p. 84)、「自立して健康な日常生活」「自立を支える」「自立」(p. 87)</p> <p>○共に生き、共に支える・福祉「自分らしく自立」「自立した生活」(p. 91)</p> <p>○経済生活を営む・「経済的に自立」「自立」(p. 101)、消費者の権利と責任「自立支援」「自立した消費者」(p. 118)</p> <p>○生活設計・「自立した人生」(p. 240)、「自立し共に生きるために」「精神的に自立」(p. 250)、「健康で自立した生活」(p. 251)</p>	<p>2009年3月告示(2013～2021年度年次進行実施) 共通教科「家庭」「家庭基礎」(2単位)「家庭総合」(4単位)「生活デザイン」(4単位)から1科目選択必修専門教科「家庭」20科目</p>
⑯	『家庭基礎 自立・共生・創造』 2016年検 2017年発行	<p>○「人生の主人公として生きる」・「生活の自立」(見開き頁 pp. 12-13)</p> <p>○自分らしい人生をつくる・乳幼児期「自律性」、青年期「社会人」「独立」「精神的自立、生活的自立、経済的自立」準備、壮年期「人間としての自立」「子どもの自立を支援」「社会人」(p. 15)、青年期「生活的自立、経済的自立、精神的自立、社会的自立、性的自立」「生活的自立」「経済的自立」「性的自立」「社会的自立」「精神的自立」(p. 17)、一人暮らし「自分の身の回りのことを自分で整える自立」(p. 20)、子どもを「自立させる」(p. 21)、結婚「経済的にも精神的にも自立」(p. 26)</p> <p>○子どもと共に育つ・保育「自立を援助する営み」(p. 36)、幼児期「自立」(p. 45)</p> <p>○高齢社会を生きる・「健康で自立した生活」「日常生活が自立できない」「日常生活の自立が困難」(p. 62)、「老化と成熟」(p. 64)、住「高齢者の自立は可能」(p. 65)、「日常生活の自立の課題」「経済的にも自立」「自立した生活」支援(p. 68)、高齢社会「自立」(p. 69)</p> <p>○共に生き、共に支える・「自分らしく自立」「自立した生活」(p. 73)</p> <p>○経済生活を営む・「経済的に自立する」(p. 170)、消費者の権利と責任「自立支援」(p. 184)</p> <p>○生活設計・「自立した人生」(p. 192)、「自立し共に生きるために」「精神的に自立」(p. 194)、「自立した生活」(p. 195)</p>	

※「自立」の語が出てきた分野およびライフステージに一重下線を、「経済的自立」「生活的自立」「精神的自立」「身体的自立」「社会的自立」「性的自立」の語が初めて登場したところに二重下線を、筆者追加。

会生活への適応」など、精神的・社会的自立に関して触れられた。

1991年発行④では、青年期以降の「経済的自立」が表された。「自律的管理」「社会人としての責任」など、身体的、精神的、経済的自立について記され、「合理的な消費生活」も加わった。さらに、乳幼児の自立だけでなく、親の子どもからの自立(子離れ)にも言及され、高齢期の自立支援に関する文脈も登場し生活課題として扱われた。以降、高齢者の自立に関する記

述は増加した。こうした背景には精神年齢の低下や、グローバル化、新自由主義、男女雇用機会均等法（1985年成立）のひろがり、高齢化率の急激な上昇等があり、これらが複雑に絡み合ったことによると考えられる。特に1970年高齢化率7.1%が、1994年には14%をこえ、さらに、2017年現在27.7%（総務省）であり、超高齢社会に対する喫緊の課題と捉えていることがわかる。

1994年発行⑤⑥では「よりよく生きるためのポイント」として「経済的自立」と「生活的自立」が記載された。「男女共に経済的にも生活的にも自立すること、自立した男女が相互の信頼に支えられて、家庭でも社会でも共同して生きていくこと」も記された。これは男女必履修に対応したものと察せられる。また、⑤以降、「親の成長と自立」について、育てながら育つという共感的応答性のある自立が述べられた。1998年発行⑦⑧では、特に「女性の経済的自立」の必要性に言及された。1994年に日本が女性差別撤廃条約に批准したことにも関係するだろう。また、「生活の自立を支援するしくみ」として「社会福祉」の説明があった。生活課題を個人・家族から社会全体で解決する方向性を示した。すなわち、1989年告示の学習指導要領改訂（1994年学年進行実施）をうけた教科書⑤⑥で自立と共生の視点が明記され、1998年発行⑦以降、社会からの援助を受ける力も必要であるとする自立も加わったと考えられ、進取的である。実教出版では1998年発行の教科書には共生の視点があるが、自立の基本はあくまでも「人に依存しない」「自分のことは自分でする」ものだった。

2003年発行⑨⑩以降の教科書タイトルは「自立・共生・創造」であった。また、⑨⑩では高齢者の自立に関する記述が増加し、「衣生活の自立」が現れた。社会とのかかわりや主体的な被服選択、管理のための知識や技術の習得などが書かれた。2007年発行⑪⑫以降、生活設計が章立てとなり、「自分らしく生きる」「支え合う暮らし」という自立し共生する生活のあり方が考えられた。実教出版家庭科教科書でも同様の傾向が見られた（齋藤，2019）。2009年告示の学習指導要領改訂を受け、2013年発行⑬～⑯では、共生が章立てとなった。また、青年期の内容には、生活的・経済的・精神的・社会的・性的自立に関する説明が挿入された。青年期の項目で記載された自立は生活的自立・経済的自立から、生活的自立・経済的自立のみならず精神的自立・社会的自立・性的自立に至るまで取り上げられ、自立に対する重要視が認められる。逆説的に言えば、日本では自立していない大人が蔓延してきたことに対する危機感の表れとも受け取ることができる。さらには、グローバル化・新自由主義経済のもと、イラク人質事件（2004年）にみられた自己責任論的な責任のすべてを個人に負わせるという世の中の風潮により、自立に関する内容が拡大したという見方もできる。

よって、教科書による自立概念の変遷は研究論文（土岐，2018）の変遷よりも先取りである

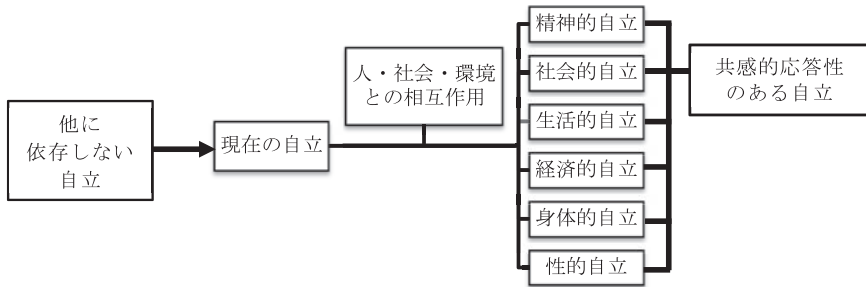


図1 家庭科教科書における自立概念図
(筆者作成)

ことが明らかになった。共感的応答性の発達についても伊藤ら（2010）により明らかにされているが、東京書籍の教科書は先進的であったといえる。保育分野では子どもの自立の視点から子どもと親の双方が発達して自立するという視点（1994年⑤）へと移行し、共感的応答性は保育分野から始まったと考えられる。ここで齋藤（2019）が提示した相互応答性のある自立は共感的応答性のある自立と同義である。

東京書籍家庭科教科書における自立概念は他に依存しない自立から共感的応答性のある自立へと変容したといえる。また、教科書にみられるライフステージに沿った記述内容の増加により、家庭科において、自立が重要視されていったと解釈される。東京書籍による自立概念は、図1に示されるとおり、精神的・社会的・生活的・経済的・身体的・性的自立を含み、特に共感的応答性をもって、人間として成長し自立するということである。

4 高校生にみられる自立

(1) 研究の対象と方法

A 学園高等学校において、高校1年生2クラス（在籍人数88人）を対象に、2019年3月8日学年末考査時に質問した自由記述の回答を対象とする。研究対象校としたA 学園A 高等学校は男子中高一貫の私立進学校で、自由な校風のもと高校生の率直な意見が出やすい。また、自分の考えをまとめる思考力や表現力に優れており、データの信ぴょう性が高まると考えられたため、当校で実施した。在籍人数88人中有効回答数81人（有効回答率92%）であった。

問題文は次に示すとおりである。この問題に対して自由記述式で回答したものを分析した。

「自立とは他の援助や支配を受けず自分の力で身を立てること」(広辞苑)といわれてきたが、当事者研究等により「つながる」ことが提案され、相互依存関係性の中で個人や国家と支え合う仕組みの重要性が説かれた。「自立」には「生涯にわたって必要に応じ他者や制度等を求めること、他者の要求を受け止め力を貸せること」、「ケアしながらケアされる」ような「相互応答性を創り出す自立」が重視されている。あなたが考える「自立」とは何か答えなさい。

分析方法は、量的には計量テキスト分析ソフト KH Coder3 を用い、KWIC コンコーダンス、関連語を検索、共起ネットワークを作成した。計量テキスト分析では個人的な主観が入らず、視覚化が可能となる。KH Coder3 は質問紙調査における自由回答やインタビュー記録などの日本語テキスト型データを計量的に分析できるフリーソフトウェアであり、現在 2800 件以上の研究に使用され信頼性が高いと考えられる。語と語の結びつきを探る共起ネットワークや内容が似た文書を探すクラスター分析なども充実しているため、KH Coder (Version 3) を使用した。また、教科書の自立概念に則り、生徒の回答を分類した。さらに、Parnafes (2012) を援用しマイクロジェネティック法 (チン & シェリン, 2018) により質的に記述分析を行い、自立に対する意識を検討した。

なお、本調査は A 学園校長および関係各位の了解のもとに行われた。

(2) 結果と考察

高校 1 年生 88 人中有効回答数 81 人 (有効回答率 92%) で、KH Coder3 の KWIC コンコーダンス、関連語を検索し、階層的クラスター分析および共起ネットワーク (図 2) を作成した。その結果、総抽出語数は 11196 であり、419 文であった。

図 2 では関連が特に強い語を線で結んだものであり、自立という語には「自分」「考える」「思う」の関連性が強く、「人」「社会」「生活」「他人」の語の使用が多かった。つまり、自立については、自分事として考え、人との関係性、生活との関係性、社会との関係性を思い遣り、自分の力で身を立てることと援助を受けることなどを多角的に思考していることがわかった。

つづいて、問題文には「他に依存しないこと」と「相互応答性を創り出す自立」が併記されていたため、両者に対して生徒がどのように考えたかを分類すると、「他に依存しないこと」を自立とする者 43% (35 人)、「相互応答性を創り出すこと」を自立とする者 57% (46 人) であった。高校生は自立を「相互応答性を創り出す自立」と考える者が多いことがわかった。

ならびに、教科書にみられる「生活的自立」「経済的自立」「精神的自立」「社会的自立」「身

家庭科における自立概念の変遷と高校生に対する意識

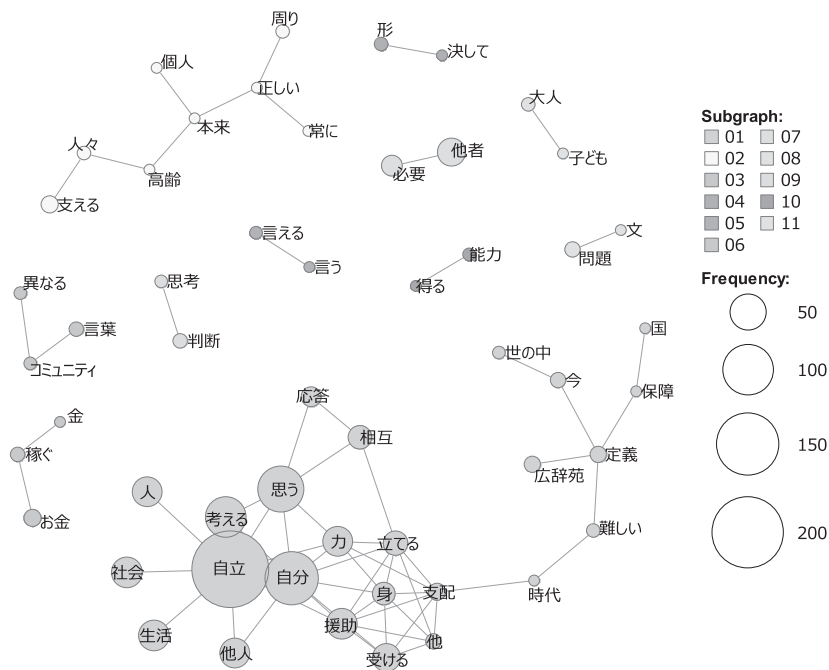


図2 高校生の自立に対する意識 共起ネットワーク図

体的自立」「性的自立」に則り分類すると、重複回答も含めると、「社会的自立」が53件と最も多く、次いで「精神的自立」51件、「経済的自立」36件であった(図3)。しかし、社会的自立と精神的自立の両方の記述があったり、社会的自立と経済的自立など複合的に捉えていた。西田ら(2001)の研究では全体をとおして「精神的自立」が最も多かったが、本研究では「社会的自立」が多かった。これは問題文に影響されたとも考えられるが、西田ら(2001)の調査時点よりも、日本における急激な高齢化や生きづらい社会全体を高校生が深刻に受けとめたからではないかと推察される。

質的分析ではParnafes(2012)を援用しマイクロジェネティック法(チン&シェリン, 2018)により、詳細に生徒の特徴的なコンテキスト(表2)を見ると、第一に共生・相互扶助の視点を記述した生徒が多いことがわかった(a20, b01, a26, a22, a36, a15, b28, a19, b31, a01, b06, a34)。a20は「社会とのコミュニケーションの中で」自己アイデンティティを確立できることを自立とした。b01は自分事として考え、生活的自立も社会貢献も自立と捉えた。自分らしく暮らすための環境を創り出せる力を自立としたa26は、他者からの助けを受けることも是とした。自立は「自分で立つこと」としながらも他人を認め理解を示したa22は共感的応答

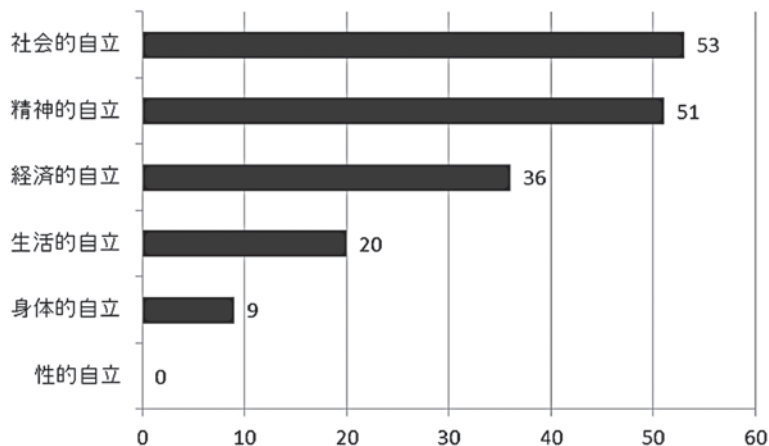


図3 高校生の自立に対する意識 (N = 81)
(重複回答)

社会的自立：他者との信頼関係構築や相互扶助ができること。
 精神的自立：責任が持てる、親に頼らないなど、自己の内面やパーソナリティの成熟。
 経済的自立：収入を獲得し、それを自己管理できること。
 生活的自立：衣食住など身の回りのことを自分でできること。
 身体的自立：身体の成熟。
 性的自立：自分の性・他者の性を尊重し責任ある行動がとれること。
 ※高校家庭科教科書に基づいた筆者による分類

性を創造することを自立としている。a36は相互応答性と自分の力で身を立てられることは矛盾しないと述べた。a15は「他者とのかかわりを大切にしながら」必要に応じて助けられることも含めて自立とした。b28は「自分の力」という中に「他人から援助を受けられる人間性や信頼」をあげた。a19は共助による自立を望んだ。b31は公助や共助という土台のもとで、「不完全な自立」を目指すことが述べられた。a01は「互いの個性を尊重し、集団で生活を立てていくこと」を自立とした。b06もお互いに生活を支え合うことを自立とした。a34は「親の庇護を離れること」を考え、広辞苑における自立を「孤立」、相互応答性のある自立を「協調」として、どちらも自立であるとしつつ、相互応答性のある自立を求めた。つまり、相互応答性のある自立を考えた生徒が多いことがわかった。a15やb28、a34にみられるように、自立を他に依存しないことと、他者や制度など必要に応じ援助を受け合うことを複合的に思索していたといえる。ここでも、相互応答性は共感的応答性と同義と捉えられる。

第二に精神的自立の視点で記述した生徒がいた (a08, a10)。a08は自立を「精神的」で、「強

家庭科における自立概念の変遷と高校生の自立に対する意識

表2 高校生の自立に対する自由記述

No.	生徒の自由記述
a20	独立と自立の差に真価が見受けられる。独りで立つ、ということは何の支えがなくとも独りで生活できる意である。しかし、自立は社会とのコミュニケーションの中で、自己を確立できるという意味での「自立」だと思う。自己主張、応答力など、内外的な能力が求められる。
b01	自立と聞くと、やはり自分一人で洗濯、食事などの家事をこなし、家賃を払えるだけの収入を得ているような一人暮らしのような状態を思い浮かべるが、人は一人で生きていけないというように、社会全体で考えれば一人暮らしをしている人も仕事をして社会に貢献しているわけなので、社会に何か役立つことができるようにあり、人々を支えられるようになったとき、それを自立と言えるのではないだろうか。ただ、自分はこの一年間家庭科の授業を受けて、いかに一人で生きる能力が欠損しているか知ったので、今必要なのは前者のようなことかもしれない。
a26	私は、「自立」を自らが満足して生活できる環境をつくり出せる力のことだと考える。そのため、他者からの助けによって自立だとみなされない状況は起こりえないと思う。
a22	「自立」とは、文字の通り、自分で立つことだと思う。そして、自分で立ったら、周りを見ることまでが自立であると考え。人間という生き物は一人で生きられない。というのは、本来間違いかもわからないが、この現代社会の中で生きていくならば、正しいと思う。他人と支え合うという以前に、他人を認め理解することが重要であると考え。常に依存する関係は好ましくはないと思うが、もし倒れそうになった時には助け合う程度を自立というのだと思う。
a36	「ケアしながらケアされる」ような自立を成すためには当然まず当初の定義である「自分の力で身を立てれること」ができるようになるのが不可欠である。今の社会はそれでさえできていない大人が大勢いる。また、「自分の力で身を立てれること」において他人との関わりを大切にしていくことも不可欠である。社会に出れば様々な場面でコミュニケーションをし、それによって誰かを助けたり、助けを求めたりすることがあると思う。よって、この2つの定義は相互にあって成り立つものである。
a15	「自立」とは読んで字のごとく「自分の力で身を立てること」であるが、人間社会の場合、自らの力だけで身を立て、保つことは難しい。したがって、他者との関わりを大切にしながら、自分でできることは自分で行い、必要に応じて他人を頼り、助けられることを含めて「自立」というべきであろう。
b28	「自立とは、他の援助や支配を受けず、自分の力で身を立てること」とあるが、大体その意味で当たっていると考え。しかし、「自分の力」というものの中に、他人から援助を受けられる程度の人間性、信頼を含めたり、援助や支配について、ごく一般的に考えられる程度（国家権力による支配、小道具の貸借）に限定したりすれば、より真の意味に近づくと考えられる。
a19	「自立」とは決して一人独力で身を立てることを指すわけではなく、「自立」した他人に一方的に頼らず、相互に助け合い、身を立てることを指すと考える。「自助、共助、公助」とあるように、もちろん「自助」も大切だが、それ以上に助け合い、つまり、「共助」による複数形としての「自立」の方がはるかに簡単であり、はるかに健全である。そもそも社会とはこの「自立」のため存在するのであり、「余力を配分し合う」ことが最も重要である。
b31	「自立」は本来的には、個人が独立して自身に関する物事を行うことであると承知しているが、現代社会で求められる「自立」はそれとは異なっているように思う。近年、我が国では少子高齢化が進み、自然現象的に「孤立」する人々が増えている。こういった人々が自ら身の回りのことをこなせるのが理想ではあるが、全ての人々がそうできるわけではない。現代においては、「公助」や「共助」といった、いざというときに頼れる土台の上に「自立」する、いわば「不完全な自立」が現状に即しており、かつ目指すべきスタイルなのではないか。

No.	生徒の自由記述
a01	互いの個性を尊重したまま、ある人の集団が一体となって生活を立てていくことができていることを「自立である」と僕は思っている。人間は一人では生きていけない生き物なのである。そこに「一人で生きることを自立とする」ということはナンセンスだ。
b06	自立とは、決して自分一人で生きていくことではないと僕は考える。元来人間というものは、決して一人では生きていけない生物である。父母に養われ、自分では何も生み出していない状態から、社会に出て仕事をするなどで、他人にも自分の生活を支えてもらい、また自分も誰かの生活を間接的に助けているということが、真の「自立」ということだと思う。
a34	高校生の視点としては、「親の庇護を離れること」が第一に思い浮かぶ。「大きな政府」の現代では国や制度の庇護を離れることはないといえるが、ひとりの個人として自己を確立することが自立であると思う。この自立について、広辞苑的解釈では「孤立」、相互応答性の自立では「協調」という語がそれぞれ当てはまるように思う。これらの二語は相反するようであり、どちらも「自立」の側面だ。僕はどちらも「自立」そのものと考えているが、選べるなら、「協調」の側面をとりたい。
b05	僕が考える「自立」とは、他人に支えられた分、それ以上に社会に貢献できるようになることだと思う。僕は幼少期より重度の乳製品アレルギーがあり、自分の記憶もまだないような頃から、周りに、特に母親によってぎりぎり支えられて命をつないできた。僕は生まれてきたくてアレルギーになったわけではないが、人として、周りの人に支えられてきて今があるので、その分以上の働きで周りの人々に貢献できるようになりたいと思っており、これが僕の目指し、考える「自立」である。
a08	「援助や支配を受けず、自分の力で身を立てること」、これはいわゆる「物理的自立」である。僕が考える「自立」というのは、精神的なものであり、他者の要求であっても、それを強制されるものではなく、自発的にその要求を受け入れるのならそれは自立であるし、他者の支えに頼ることも、自分の意志で他者の支えを借りて、目的のために行動するのであれば、それは自立である。ジャングルで一人で生きることが自立なのではなく、社会の中で生きていけることを自立というのだ。
a10	「自立」とは、他者とのつながり、相互依存の中で、自分という存在を物質的にも精神的にも保っている状態だと考える。私たちの生活は、様々な人、人が作ったものであふれており、自分だけで生きていくなど不可能である。そのなかで、どれだけ自分でやり、どれだけ他者に依存するかを判断し、生活することが大切である。また、自分で思考し、行動できる精神を持つことも大切である。
b11	「自立」の本来の意味は広辞苑の通りなので、他者と協力して生きることを自立とは言わないと思う。他者とのケアで相互応答性を創り出すことは自立ではなく、何か別の名前（共立とか）をつけるべきである。「自立」は自分一人で生きていくことだと思うので、高齢化が進む中、「自立」はするべきではない。

※高校生が考える「自立」に関する記述について、下線を筆者追加。

制されるものではなく、自発的に受け入れるのならば自立」であり、他者の支えに頼ることも、「自分の意志で目的のために行動する」ならば自立とした。a10は相互依存関係の中で、「自分で思考し、行動できる精神を持つこと」の重要性を指摘した。つまり、相互応答性のある自立の基盤として精神的自立をあげたことが判明した。

第三に社会貢献の視点があった（b01, b05）。b01は「社会に何か役立つことができるように

なり、人々を支えられるようになったとき」を自立とした。b05も「周りに支えられて」今の自分があるので、社会に貢献できるようになることを表した。また、自立について考えながら、自分がどう生きていくかも熟考したことがわかった。

さらに、「自立はするべきではない」と述べたb11は逆説的な書き方で、他者と生きることを自立と言わないのならば自立すべきでない」と述べ、高齢化を踏まえ他者と共に生きる共生という視点があった。つまり、高校生には共生の視点もあることがわかった。

現在の高校生における自立に対する意識は、他に依存しないことを自立と考えながらも、現代社会に鑑みて、助けを求めたり助けることができるようになりたいと考えていることが判明した。このような支え合う社会を求めつつも、依存関係にならないための精神的自立をあげる者もいた。加えて、経済的自立、生活的自立についても述べられていた。ただし、教科書に書かれた性的自立については、高校生は全く触れていなかった。

つまり、高校生は自立に対して、人や制度にアクセスできる相互応答性（共感的応答性）のある共生の視点をもった社会的自立、依存関係に陥らない精神的自立、経済的自立、生活的自立等を組み合わせて捉えたことがわかった。換言すれば、現在の教科書内容と同様の傾向といえる。また、単に、自立が他に依存することかしないことかではなく、自分事として現代日本社会の中での自立について考えることをとおして複合的であることに気づき、その上、どう生きていくかという生き方にまで考えが及んだことが明らかになった。

5 結論および今後の課題

家庭科における自立概念の変遷と現在の高校生の自立に対する意識を調査した。その結果、明らかになった点を以下に示す。

第一に、東京書籍にみられる家庭科における自立概念は幼児の精神的・社会的自立に始まり、青年期および成人期の生活的・経済的自立へ、加えて身体的・性的自立、そして親子関係や高齢者と高校生、乳幼児と高校生など、人との関係性の中で共感的応答性のある自立が示された。また、共感的応答性は保育分野から始まったことが明らかになった。

第二に、高校生の自立に対する自由記述より、自分事として、人との関係性、生活との関係性、社会との関係性を考え、自分の力で身を立てることと援助を受けることなどを多元的・多角的に思考したことがわかった。教科書に照らし合わせてみると、社会的自立をあげる者が多く、続いて精神的自立、経済的自立、生活的自立であったが、複合的に捉えていたといえる。質的分析では、社会全体の生きづらさを感じ、共生・相互扶助の視点を記述した生徒が多かつ

たこと、精神的自立の視点、社会貢献の視点、自分のライフデザイン構築に向けての熟考がみられたことがわかった。高校生の自立に対する意識は、共生・相互扶助・社会貢献の視点を持ち、人や制度にアクセスできる相互応答性のある社会的自立を求めたことが明らかになった。依存に陥らない共生という点で精神的自立、経済的自立、生活的自立をあげていた。性的自立や身体的自立について考える者は少なかった。さらに、現代社会に鑑み自立について自分事として思索することをとおして、自分の生き方にまで思い至ったことが明らかになった。

第三に、第一と第二の結果を照らし合わせると、高校家庭科教科書にみられた自立と高校生の自立観には関連性があったという見方ができる。高校生の共生の視点と、少子高齢社会という社会背景を踏まえた社会的自立や精神的自立、経済的自立など複合的に捉えた点は教科書内容に類似した反面、高校生は教科書では別項目として扱われたライフデザインを統合的に考え、教科書に書かれた身体的・性的自立についてはほとんど触れていなかった。これらを踏まえると、教科書の果たす役割は大きいものの、それだけでは十分とはいえない。教員の役割や現代社会と生活環境を捉える資料も重要である。教員は自立についての社会的背景をおさえ、家庭・地域社会と連携し、生活の主体者意識を引き出す共感的応答性のある授業の中で自立を複合的・重層的に育成することが示唆された。

ビースタ(2014)は誰かから自分に呼びかけられたと感じて主体的になることを示し、主体性には関係性が欠かせないとした。共感的応答性のある家庭科授業では、乳幼児とのふれあい体験、高齢者との交流、多国籍の人々との交流もあるだろう。しかし、まずは教室にいる生徒同士が主体的に対話し、共感的応答性を創出できる授業空間をつくりださなければならない。教員と生徒、生徒同士の信頼関係をどう構築させるかは鍵となる。教員の自立観が生徒の自立観に大きな影響を与えることは否めないため、教員自身が改めて自立とは何かを見つめなおしたいものである。ならびに、個人個人が自立について思索できるゆとりある時間も必要であろう。そこから自分らしい最適な生活を創出できると考えられる。

今後の課題は、家庭科教育が人間教育であることを踏まえ、「生きていくとはどういうことなのか?」「幸福とは?」「自立とは?」等の哲学的対話授業(リップマン, 2014)を家庭科授業に取り入れたプログラムを開発することである。また、教員の自立観についても検討したい。調理実習や被服実習をとおして育むことはもちろん、自分で考えることを重視し自己アイデンティティ形成に寄り添うとともに、人・社会・自然との関係性を見直し、対話と省察を往還させる授業プログラムを開発し、生活の主体者意識を誘起させ、生活の意義や自分らしく生きることについて問い続けたい。

注

- 1 帯木蓬生 (2017) 『ネガティブ・ケイパビリティ 答えの出ない事態に耐える力』によれば、詩人キーツがシェイクスピアに見いだした「負の力」がもとであり、精神科医ビオンにより再発見され、答えの出ない事態に耐える力をネガティブ・ケイパビリティとした。
- 2 岡野八代によれば、日本におけるケアの倫理に関する議論は普遍的な正義論と個別の文脈を重視したものが多かったが、人間は傷つきやすく (vulnerable)、ケアする者には感知できない感情を持った他者があり、その他者と関わるために葛藤をコントロールする非暴力な態度、気づかいが求められるとした。

引用・参考文献

- 伊藤葉子, 倉持清美, 岡野雅子, 金田利子, 2010, 「中・高・大学生の幼児への共感的応答性の発達とその影響要因」『日本家政学会誌』 Vol. 61 No. 3, pp. 129-136
- 岡野八代, 2015, 「個人を育む家庭・家族の社会的意義—ケアの倫理からみた「自立」批判から—」『日本家庭科教育学会誌』 Vol. 58 No. 3, pp. 133-143
- チン, クラーク・A., & シェリン, L・ブルース., 2018, 望月俊男 (訳), 「第9章マイクロジェネティックス法」, R. K. ソーヤー編, 森敏昭・秋田喜代美・大島純・白水始 (監訳), 望月俊男・益川弘如 (編訳), 『学習科学ハンドブック (第二版) 第1巻—基礎 / 方法論—』, 北大路書房, pp. 145-162
- 国立教育政策研究所「学習指導要領データベース」<https://www.nier.go.jp/guideline/>, 2019,06,23
- 齋藤美重子, 2019, 「SDGs 理念に貢献する家庭科授業」『川村学園女子大学紀要』第30巻第2号, pp. 27-45
- 齋藤美重子, 2019, 「家庭科教育の課題と可能性—学習指導要領および自立概念の変遷をもとに—」『麻布中学校・高等学校紀要』第7号, pp. 23-46
- 土井隆義, 2014, 『つながりを煽られる子どもたち—ネット依存といじめ問題を考える』岩波書店, pp. 1-87
- 土岐圭佑, 2018, 「家庭科研究における自立概念の変遷と課題」『日本家政学会誌』 Vol. 69 No.4, pp. 27-39
- 西田安哉美・森田美弥子, 2001, 「高校生の自立観：学年による違いを中心に」『日本青年心理学会大会発表論文集』9 (0), pp. 33-34
- 日本家政学会家政原論部会編, 2018, 『やさしい家政学原論』建帛社, pp. 1-205
- 帯木蓬生, 2017, 『ネガティブ・ケイパビリティ 答えの出ない事態に耐える力』朝日新聞出版, pp. 1-264
- ビースタ, G. J. J., 上野正道・藤井佳世・中村 (新井) 清二 (訳), 2014, 『民主主義を学習する：教育・生涯学習・シティズンシップ』勁草書房
- 樋口耕一, 2014, 『社会調査のための計量テキスト分析 —内容分析の継承と発展を目指して—』ナカニシヤ出版
- 樋口耕一, 2017, 「計量テキスト分析およびKH Coderの利用状況と展望」『社会学評論』68巻 第3号, pp. 334-350
- 矢野由紀, 2013, 「自立した人間の育成を目指す家庭科」, 日本家庭科教育学会編『生きる力をそなえた子どもたち』学文社, pp. 52-55
- リップマン, M., 河野哲也・土屋陽介・村瀬智之 (監修), 2014, 『探求の共同体—考えるための教室』玉

齋 藤 美重子

川大学出版部 .

Parnafes, O. 2012, Developing Explanations and Developing Understanding: Students Explain the Phases of the Moon Using Visual, *Cognition and Instruction*, 30 (4), *Taylor & Francis Group, LLC* 359–403

謝 辞

調査にご協力いただいた学校法人麻布学園校長および関係各位に感謝申し上げます。